

◎中村哲医師アーカイブ

人の生と死をつなぐ仕事

中村哲×徳永進（医師）

*「中村哲対談集 人・水・命」より抜粋

二〇〇四年の対談

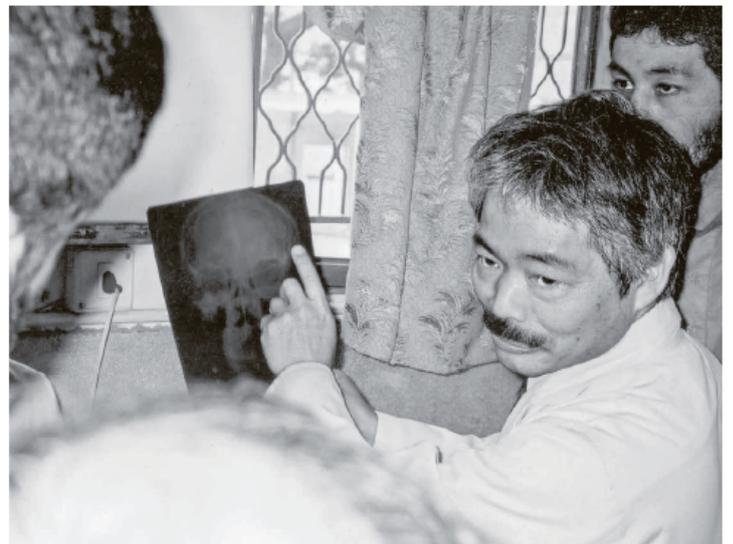
中村 キザな言い方をすると、医療とは人間の生と死の狭間を取り扱う仕事だったのではないか。ふつうの人がどうあがいても手の届かない空間との接点の職業というのがいくつかあって、床屋（外科医）、医者も入っていたと思います。つまり、われわれの先祖は床屋やまじない師であるわけです。私が言いたいのは、元まじない師、元呪術師が大きな顔をするな、と（笑）。

それと、呪術師であろうと床屋であろうと、その時代にあつては生死のあいだを取り扱う仕事で、床屋は人を生かす方向で外科の手術を行い、まじない師はその人が命ながらえて幸せになれるようにと神に祈った。つまり人々をなだめる仕事だったわけですね。それが医の根本的な倫理だったのではないか。なぜ医者がかつてから神聖視されてきたかという点、いまも言ったように、人の生と死をつなぐ接点の仕事だからだと思ふんです。ということは、そこには単なる「医療技術者」以上のものがあるんじゃない

か。それがいま忘れられていて、医者はいかに儲けるか、患者はいかに告発するかという方向に行つて、医者も一般民衆も含めて、何かが変わりつつあるんじゃないかという気がするんです。

現地に行きますと、何もないうちで何かにすがろうとする、必死で生きようとする姿と、何かの原因で簡単に死んでしまう現実とがあつて、生と死がいつも隣り合わせにあるわけです。そういうところから日本を考えると、医療そのものが日本はおかしくなつてるんじゃないか。

徳永 ええ。一方で、在宅で死を迎えるという点には、私はまだけっこうチャンスがあるかなと思つています。それによって医療を取り返すチャンスがあるなと思つていふんです。在宅というのは、患者さんの表情がうんと違ってきますし、家族の表情もうんと落ちついてくる。主権移譲という感じで主権が患者さんと家族のほうに行つて「こんにちは。お邪魔します」「ああ、どう



PMS 基地病院でカンファレンス中の中村医師（1999年）

ぞ上がんなせえ」という感じになって、病院と逆になるんですよ。主客逆転というかもとに戻る。正常化する。そこで話される言葉も変わってきて、「先生、どうせいけんでしょうなあ」というあつげらんとした言葉になつてくる。（略）

向こうで患者さんを叱つたりすることはありますか。

中村 しょっちゅうあります。

徳永 パターナリズム（父権主義）を發揮してるんですね（笑）。

中村 というか、現地は全体が男性社会な

んですね。おとつあんの命令は絶対という社会なんです。だからそれがある程度通用するといいますが、「こんなことしちゃダメじゃないか！」というセリフが受け入れてもらえるんです。

日本に帰ってきたときにわたしがいま非常勤で勤務しているのは福岡の八女^{やま}というところにある病院なんです。田舎なものですから、そのへんが違うんでしょうね。「パートナーリズム」と言われても、ピンと来ないですよ。それがふつうじゃないかと思っているものですから(笑)。少なくとも九州の田舎は、一般的な気風がそうなんです。あんまりやさしい対応をすると、特にお年寄りには気持ち悪がる。だから、「先生、たばこ吸ってもいいですか」「いいよ、肺がんで死ぬだけだいたい」(笑)。

徳永 医療者と患者さんが持つ信頼関係が勝負だということですね。

中村 どうかすると半年以上も日本の患者と会わないときがありますので、「先生、無事お帰りで」「無事、生きて帰りました」と言ってお互いに無事を喜び合っているんです(笑)。